

三人が読む

## Nature Land

自然環境マガジン / ネイチャーランド



1997 5月号 (創刊号)  
 特集 森からのメッセージ  
 6月号 (創刊2号)  
 特集 ビオトープのある暮らし  
 7月号 (創刊3号)  
 特集 水族館であそぼう

月刊 / A4 版 98p / 定価 1000 円  
 発行 = (株) ネイチャーランド

書店販売はせず、TEL・FAX・インターネットで購読申込受付。  
 TEL 03-5645-2125  
 【インターネット情報】アドレス  
<http://www.natureland.com>  
 e-mail info@natureland.com

…新雑誌創刊に期待して率直な感想を…

自

自然環境マガジンとして、これまでにない新しいネイチャー雑誌を、という主旨で創刊された『Nature Land』。たまたま自分の好きな方のインタビューが載っていたのをきっかけに読んでみた。本誌は、今までの専門誌や娯楽・趣味として扱われる Outdoor 誌とは、ちょっと違う。内容・情報とも多様である。国内・国外の情報、身近な環境問題を取り上げたりしている。創刊号は、森の特集が掲載されている。森について幾つかの内容があるが、中でも大学の演習林勤務をしていた方のコメントを読んでいたらなんだか楽しくなってきた。

今後、身近な問題についてもっと具体的に突っ込んだ内容をとりあげてほしいと思う。身近ではあるがあまり深刻には考えられない他人事的要素として受けとめられるような感じがするのである。

雑誌というだけあり気軽に読めるので自然や環境問題等に関心を持ち始めた方に良いと思う一冊である。

(本社自然環境調査室・久保裕美)

自

自然の美しさ・豊かさ、自然を守る大切さを感じる、これまでにない自然環境マガジンということなので期待したのですが、創刊号を読み終わってみて少々物足りない感じを受けました。どの記事も従来からある環境問題についての一般的な切り口と同じ、悪い言い方をすれば二番煎じという感じがします。特集は「森からのメッセージ」ということで、森のしくみを教科書的に羅列してみたり、林業としての森林保護を紹介してみたり、森林保護が抱える様々な問題を指摘したりしていますが、はたしてそれだけが森からのメッセージなのでしょうか。森からのメッセージというテーマなら、例えば、森を構成する様々な生物の持つ不思議な魅力を、最新の生態学や群集生物学の分野から一般の人にもわかりやすく紹介することなども、森の大切さを感じるための重要な要素となると思うのですが、そういった内容を欠いているのが残念です。

(本社自然環境調査室・重昆達也)

こ

のような雑誌が創刊されるとき、以前ならすごく期待したものであるが、最近はそれほどでもない。現在は自然や環境をテーマにした雑誌やその他のメディアも多く、環境関連の様々な情報が容易に手にはいる時代になった。情報に食傷気味というか、情報を消化しきれない感じである。その中で、価値のある情報を集め、たくさんの読者に関心を持ってもらい、そして購読してもらう。そんな雑誌づくりは非常に難しいのではないかなと思う。

この雑誌の内容は、自然誌的なものから環境問題、エッセイ、インターネット情報など幅が広い。広範囲の情報を得ることが出来る反面、雑誌の視点がはっきりしないような気がする。また、例えば我々の専門分野であるビオトープ、環境アセスの記事についてみると、アセス法制化や学校でのビオトープづくりの話が概略的に紹介されているだけで、よく耳にする話ばかりで新鮮さはなかった。ちなみに、おもしろかった記事はケビン・ショートの里山自然博物館。やはり実際の体験に根ざした記事はおもしろい。

広範囲でしかも深くつっこんでいる。そんな雑誌づくりは難しいと思うが、今後の編集部の工夫と努力に期待したい。

(代表取締役社長・高塚敏)

セミナー & 公開座談会と現地見学会

「水辺、広場、自然復元の世紀」

セミナー & 公開座談会と見学会は2日間行われ、1日目の現地見学会では宮ヶ瀬ダム周辺のビオトープ空間やダムを作るために削られた採石場跡地ののり面の緑化手法の見学、多自然型に再改修された厚木市玉川や大和市引地川、横浜市いたち川の3河川をまわり、2日目は鎌倉芸術館ホールで静岡大学教授 杉山恵一氏、日本大学教授 勝野武彦氏の基調講演の後、公開座談会が行われました。

私が今回の見学会で驚き、そして心に残ったのが玉川、引地川、いたち川で、釣り竿や、網を手に持ち水中にいる獲物に目を光らせながら生息している「ミズガキ」です。この「ミズガキ」という言葉は『日本の川』（構成・監修：水野信彦・君塚芳輝 / 発行：草土文化）という本等で見られますが、大まかにいえば川の中に入って遊んだり、魚やヤゴなどの水中にいる生き物を捕まえようとしている子供のことです。

私も幼い頃は「ミズガキ」といわれる生き物で、田んぼの脇の小川や用水路で土の穴の中に腕を突っ込み、ドロドロになりながら毎週のようにフナ、オイカワ、ザリガニやナマズなどを捕まえに行きすごしていたものですが、最近ではどこの川もコンクリートで固められてしまい、ほとんどの川で、とんとしばらく「ミズガキを見たなあ」という経験はなかったのではないかと

いうことを思い出しました。

川の自然の豊かさを指標する「ミズガキ」の減少は川をコンクリートで固め、フェンスを張ったことにより近寄ることができなくなってしまったことや、河川改修を行ったことによって「ミズガキ」を引きつけるための生き物が極端に減ってしまったことが原因だと私は考えています。ですが、この3つの河川では無表情になっていた河川を再改修して、一部分ではありますが流れに変化をもたせたことによって、今までどこにいたのであろうかと思ってしまうようなオイカワなどの魚がたくさん泳ぎ、それにつられて「ミズガキ」が集まってくるといったような、時が経つのを忘れてしまう程、見えていんだかしあわせな空間ができあがっていたのです。

1997年5月11日～12日

主催 自然環境復元研究会

共催 日本ビオトープ協会・日本環境アセスメント協会、全国水環境交流会、鎌倉の川びらきの会、よこはまかわを考える会、よこはま水辺環境研究会、恩田の谷戸ファンクラブ

後援 建設省宮ヶ瀬ダム工事事務所、環境事業団地球環境基金、神奈川県、横浜市、鎌倉市、神奈川新聞社、東京電力㈱神奈川支店、東京ガス㈱、神奈川中央交通㈱

今回の見学会を通して私は沢山の勉強をさせてもらいましたが、手法はどうあれ、まず、土があって緑があるといった自然のかたち近づけることが、絶滅危惧種ともいふべき「ミズガキ」を救う最善の策であるということを確認しました。

セミナーでの杉山先生の講演は、静岡大学校内につくられたビオトープ空間の事例について、実際にどのようなしつらえをし、そのしつらえにはどのような生き物が集まってきたかなどスライドを中心に行われました。また、私が学生時代にお世話になった（今でもそうなのですが・・・）勝野先生の講演では、ドイツを例にとりて広範囲で見たビオトープネットワーク整備の必要性、多様なタイプの景観と生態系・ビオトープのつながりがいかに重要であるかということについて話されました。

公開座談会では様々なことが話し合われましたが、これからは市民と行政、そして学者やコンサルタントが協力し、一緒になって物事を進めて行かなくてはならないということが非常に大事であるということにたどり着きました。

今回、私が一連のセミナーに参加して感じたことは、地元地域を愛する市民団体が多く存在し、そしてその各団体がとても意欲的に、また真剣に今後の自然のありかたについて考えているということでした。

（本社業務推進室・井上剛）

現地見学会（5月11日）

宮ヶ瀬ダム（東沢ビオトープ） 原石山跡地（ポット苗の森） 厚木市玉川（多自然型川づくり）

大和市引地川（多自然型川づくり） 「A」コースまたは「B」コース

「A」 横浜市立舞岡公園（谷津田の公園化） / 「B」 横浜市・いたち川（都市内エコアップ）

セミナー & 公開座談会（5月12日）

基調講演

- 1 「景観保全と自然環境復元の立場」 静岡大学教授 杉山恵一
- 2 「ビオトープの理念と実践」 日本大学教授 勝野武彦

公開座談会

「エコシティのあり方を考える」

コーディネーター 静岡大学教授 杉山恵一

パネリスト 菅 孝能（㈱山手総合計画研究所）・鈴木邦雄（横浜国立大学教授）・田中哲夫（柳とあそぼう引地川実行委員会）・村橋克彦（横浜市立大学教授）・森 清和（横浜市環境科学研究所）